

中国医書における「瘴」の成立と変遷考

黄 弋 栗

はじめに

「瘴」は、山川の毒気や南方の酷暑に起因する風土病の一種と認識されており、疾病の発生原理及び感染のメカニズムを理解できなかった前近代の人々が、南方地域や山林で発生する多くの疾患を合理的に説明するために創出した概念である。古代の医書においては、常に傷寒病類または瘴疾類に分類されている。

「瘴気」という概念の中国文献における初出は、通常、朱勃が紀元四九年に光武帝劉秀に上奏した文書の「又出^①征交趾^②、土多^③瘴氣^④」（『後漢書』馬援伝）という一文であると認められている。^⑤しかし、当時の文書の書写において、「瘴」という概念が必ずしも「瘴」の表記で記されていたとは限らない。『後漢書』には宋以前の抄本は現存しておらず、現在広く使われている本は、唐の李賢注本を底本とし、少なくとも一度の校正を経た北宋本の系統に属するものである。この宋刊本において「瘴」と表記される文字は、もともと「障」と書かれていた可能性が高いと指摘されている。^⑥

実際、唐以前に成立した文献における「瘴」の表記は極めて多様で

あった。『文選』はその代表例であり、そこには少なくとも以下の三種類の表記が存在する。

- ① 左思「魏都賦」宅土^{フシヨ}燠暑^{ホツキョウ}、封疆^{マツロ}障癘^{ワルホ}。（卷六）^④
- ② 鮑照「苦熱行」瘴氣昼熏^{マツロ}体、茵露^{マツロ}夜霑^{ワルホ}衣。（卷二十八）
- ③ 劉孝標「廣絶交論」流離大海之南^①、寄^②命鄣癘之地^③。（卷五十五）

障や鄣・瘴などの文字は、共通の語源を持つ一群であり、本来は「隔たり」を意味している。「瘴」はもともと「障」の俗字の一つであるか、あるいは「瘴」との混同から生じた可能性があるとも考えられる。^⑤

「章」から派生する漢字の古辞書（字書や韻書など）における収録状況は、次表にまとめられる。（「瘴」・「障」に関わる内容は傍線部で示した。）

表 日・中の字書と韻書における「章」派生字の収録状況

書名(略称)	成立時期(備考)	収録漢字(注)
大徐本説文解字	後漢(九八六年校訂)	章・障・郭・漳・漳
爾雅	漢前後	章・障
字林	西晋(呂忱著、佚)	▼唐韻「瘡」注参照。
原本玉篇	五四三年	殘篇・章・障・障(卷二十二) ▼篆隸・障・郭・漳
切韻諸古写本	六〇一年序	平声「章」小韻は一部の殘卷に存する。 略。 去声「障」小韻は佚。▼唐韻・障・嶂・
北京故宫博物院藏王仁昫刊謬補缺切韻(王韻三)	七〇六年(唐蘭・周祖謨らの推測による)	平三十七陽・章・漳・漳・障・郭。 去四十漾・障(亦作瘡・郭・四)・嶂・
ペリオ二〇一一刊謬補缺切韻(王韻一)	同前(書写年代は王韻三に近い)	平・漳・郭 去四十漾・(筆者私補・障・嶂・漳・瘡(病))
裴務齊正字本刊謬補缺切韻王韻(王韻二)	不明(王韻三に遅れて、中唐以前成立)	平五陽・章・漳・漳・郭・障。 去五漾・障(四・嶂・漳(瘡)・漳
蔣斧印本唐韻殘卷(唐韻)	七三三年(去・入声一部殘存)	去四十三漾・障(四加一)・漳・嶂・瘡(熱。出「字林」加)
高山寺本篆隸萬象名義(篆隸)	九世紀前半	漳・郭・章・漳・漳・漳・漳
天治本新撰字鏡	九〇〇年前後(一一二四年写本)	漳・郭・章・漳・漳・漳・漳
大広益会玉篇(宋本玉篇)	六七四年孫強増補、一〇一三年陳彭年重修	漳・郭・章・漳・漳・漳・漳
大宋重修広韻	一〇〇八年陳彭年ら増訂編纂	平四十陽・章・漳・漳・郭・漳・漳 去四十一漾・障・漳・漳・嶂・漳(熱病)

従来、「瘡」を最も早く収録した辞書は『玉篇』とされてきた⁶⁾。し

かし、この見解は『宋本玉篇』に基づくものであると推測される。「瘡」部首の文字を収録する『原本玉篇』(五四三年顧野王撰)の卷十一は散逸しており、直接参照することは不可能である。しかし、『原本玉篇』を踏襲して編纂された『篆隸萬象名義』(九世紀前半空海撰)には「瘡」という字が見られない。このことから、『原本玉篇』には「瘡」が編入されていなかったと推測される。したがって、『宋本玉篇』に収録されている「瘡」は、六七四年に孫強が行った増補や、北宋時代に陳彭年が実施した増訂などの編纂過程で追加された可能性が考えられる。

一方、六〇一年成書の『切韻』は、殘卷として僅かに伝わるものの、『障』小韻が所在する部分は散佚し、現存していない。幸いに、『切韻』を基に孫愐が増訂した『唐韻』の殘卷⁷⁾には、「障(四、加一)」小韻に「瘡」の字が収録されおり、これを通じて『切韻』の一端を垣間見ることが可能である。「瘡」には「熱。出「字林」加。」との注記が付されている。「四、加一」は、「障」小韻に収録される「障、漳、嶂、瘡」の四字のうち、「障、漳、嶂」の三字が『切韻』に既に含まれており、「瘡」の一字のみが新たに追加されたものであることを意味する。換言すれば、『切韻』には「瘡」が未収録であったことが明らかである。さらに、「瘡」が「字林」という書物によって補入されたことは「瘡」の注記から分かる。ここで言及される『字林』は、『説文解字』に次ぎ、『玉篇』に先立って成立した呂忱(生没年不詳。西晋の人か)の字書『字林』(散佚)を指す。『唐韻』の記載を信頼する場合、「瘡」という表記の初出は三世紀頃まで遡ることとなる。ただし、『唐韻』が参照した『字林』が、既に後世の増補を経たものである可能性も否定できな

い。いずれにせよ、「瘧」が現存する古辞書（字書や韻書）に初めて登場するのは、唐の王仁昫が『切韻』に基づいて補訂した『玉韻』であると言える。

ところで、上記の『文選』③における「鄣癘」について、北宋本と尤袤本（共に李善單注本）では「瘴癘」と表記されている。韻書において「瘴」に先立って現れた「瘴」の表記が使われる「瘴氣」や「瘴癘」などは、「瘴」の表記を用いる流布本とは異なる版本でしばしば見られる。

本稿では、従来見過ごされてきた「瘴」の表記が用いられる「瘴」と通常の「瘴」とはいかに異なるのかという素朴な疑問を出発点として、中国の医書において、「瘴」の表記と定義はどのような経緯をたどって変遷してきたのかを考察していく。

一、「瘴」の本質——傷寒・疫癘・瘧との比較を通して

『宋本玉篇』では「瘴」に「之亮切、瘴癘也^⑧」との略注が付されている。また、『切韻』の流れを汲むとされる『広韻』^⑨には「瘴、熱病」と記されている。ほかの文献においても、「瘴」を「熱毒之病」・「温病」・「疫」・「瘧」と同定する解釈が随処に見受けられる。これらの混淆を避け、「瘴」の本質を理解するためには、まず「瘴」及びそれに関連する基本的な概念を整理する必要がある。

——一、傷寒・熱病・温病

『素問』は前漢の医書で、『靈樞』とともに中国最古の医学書と呼ばれる『黄帝内经』を構成する。この『素問』の熱論篇では、傷寒と熱病との従属関係を明言する内容が書かれている。

黄帝問曰、今夫熱病者、皆傷寒之類也。^⑩

唐の王氷は、次のように注釈している。

寒者、冬氣也。（中略）^⑪中而即病、名曰「傷寒」。不^⑫即病者、寒毒藏^⑬於肌膚、至^⑭夏至前^⑮、變為「温病」。夏至後、變為「熱病」。然其發起、皆為「傷寒」致^⑯之。故曰「熱病」者、皆傷寒之類也。^⑰

「寒」、すなわち冬の寒氣に冒触すれば、「傷寒」にかかる。その場で発症すれば、その病は「傷寒」と呼ばれる。すぐに発病しない場合もあり、その際、「寒」の毒は肌の下に潜んでいることになる。冬から夏至の日までに発病すれば、それは「温病」と称し、夏至の日以降に発病した場合は「熱病」と称する。

また、『黄帝内经』より後、『傷寒論』^⑱より早く成立したとされる『難経』では、傷寒を五種類に分ける記載が見られる。以下は第五十八難の一部内容である。

傷寒有^⑲五、有^⑳「中風」、有^㉑「傷寒」、有^㉒「湿温」、有^㉓「熱病」、有^㉔「温病」、

其所_レ苦各不_レ同⁽¹³⁾。

傷寒と一口に言っても、「傷寒大類」とその下位概念である「傷寒小類」に分けられる。寒氣に冒されて直ちに発病する「傷寒（小類）」、および異なる時期に発症する「熱病」と「温病」は、「中風」「湿温」と並んで「傷寒大類」に属する病である。『素問』の趣旨と一致している。

一―二、疫癘（瘧瘧）

民衆が多く病にかかることを「疫」と呼ぶ。「癘」は重篤な疾患を意味する。『諸病源候論』（以下、『病源論』）については後述する）の卷十「温病候」に付録される「疫癘候」には、次の一文が記されている。

其病与_二時氣・温・熱等病_一相類、皆由_二一歳之内、節氣不_レ和、寒暑乖_レ候。或有_二暴風疾雨、霧露不_レ散、則民多_二疾疫_一。病無長少、率_{オホムネ}皆相似、如_レ有_二鬼厲之氣_一。故云_二疫癘病_一。

「疫癘」は「時行」（流行病の一種）や「温病」・「熱病」と類似しており、節氣の不調や寒暑の乱れ、暴風や疾雨、霧露の滞留などにより、民衆に多発する病である。老若を問わず、症状が相似しているため、あたかも鬼癘の氣に覆われたように見えるとされている。ただし、「疫癘」は「時行」よりも疾病の易感性や普遍性を強調している。また、「瘧氣（瘧）」は「霧露」に近い性質を持ち、ある地域を覆う無形の氣

として認識されていたため、唐以前の医書においては常に「疫癘」に付随して配置されている。

一―三、瘧

「瘧病」は、病源の立場から見ると、「傷寒大類」や「温病」・「熱病」など「寒に傷らるる病」とは正反対の病氣であり、いわゆる「傷暑の病」である。『素問』「生氣通天論第三」には、以下のような記述を見出すことができる。

是以、春傷_二於風_一、邪氣留連、乃為_二洞泄^{ドウセツ}。夏傷_二於暑_一、秋為_二痲瘧^{マカ}。秋傷_二於湿_一、上逆而欬、発為_二痿厥_一。冬傷_二於寒_一、春必温病。

傍線部の二句は、「傷暑の病」と「傷寒の病」との違いをよく説明している。夏には暑氣に傷められると、秋には「痲瘧」となる。「痲瘧」とは、二日に一度起こる瘧の類である。

『素問』「瘧論篇」はまた、「黃帝問曰、夫痲瘧、皆生於風。其著作有者、何也」という問答形式の論述をもって、「瘧」は「傷風の病」であると定義している。「風は陽氣なり」（『病源論』「風瘧候」）とあるから、「傷風」は「傷暑」と矛盾しない。「傷風説」と「傷暑説」という二説は、後世の医薬書に大きな影響を与えた。『病源論』「瘧病候」は傷暑の説を受け入れ、「夏日傷_レ暑、秋必病_レ瘧」と述べ、同書の「風瘧候」は、傷風の説を継承し、「夫瘧皆生_二於風_一」と述べている。

一四、瘧

ミアズマ(悪い空気)が引き起こすマラリアの一種を意味する「瘧」という用語は、医書において通常「瘧瘧」(『肘後備急方』)や「山瘧瘧」(『病源論』)として記載されている。本節では、「瘧(瘧)」と一般的な「瘧」との相違点について検討する。

唐の王燾が編纂した『外台秘要方』(以下、「外台方」)は、散佚した医薬書の内容を大量に引用しているため、輯佚にあたつて不可欠な医方書として重視されてきた。この『外台方』の「卷五・瘧病」には「備急」¹⁵という書物から引用された輯佚文が見える。

夫瘧與瘧、分作二兩名、其實一致。或先寒後熱、或先熱後寒。嶺南率稱為瘧、江北總號為瘧。此由方言不同、非是別有異病。然南方溫毒、此病尤甚。原其所歸、大略有四。一山溪毒氣、二風溫痰飲、三加之鬼癘、四發以熱毒、在此之中、熱毒最重。

「瘧(瘧)」と「瘧」は、名称こそ異なるが、実際には同じ病気である。ただし、方言の違いにより、嶺北では「瘧」と呼ばれるものを、嶺南では「瘧」と称しているだけである。ところが、南方の「瘧」は、嶺北の「瘧」より危険性が高いとされている。原因としては、「山溪毒氣」・「風溫痰飲」・「鬼癘」・「熱毒」の四つが挙げられ、その中でも特に「熱毒」が主要な原因とされている。

このように「瘧(瘧)」が「瘧(瘧)」となる理由は、通常の「瘧」の病因に「熱毒」と「山溪毒氣」が付け加えられている点にある。こ

こでいう「山溪毒氣」は、後述するように「瘧氣」の一種と特定できるものである。要するに、「瘧(瘧)」とは「瘧氣」によって引き起こされる重度な瘧病と言える。

三木榮氏は現代の医学知識に基づき、前近代東アジアの疾病を次の三種に分類している。

- (1) 無形の高熱を主徴とするもの。(流行性感冒群など)
- (2) 有形・発疹を主徴とするもの。(痘瘡・麻疹など)
- (3) 独自に特異の症状を主徴とするもの。(マラリアなど)¹⁶

前述した一―一と一―二の傷寒大類は三木氏の分類における(1)に該当し、一―三と一―四の瘧類は(3)に属するものと考えられる。

二、中国医書における「瘧」

多紀元胤『医籍考』によると、中国医書は医経、本草、食治、藏象、診法、明堂経脈(鍼灸)、方論、史伝と運氣の九大類に分類される。方論にはさらに、傷寒、溫疫、五臟、金匱、雜病雜藥、寒食散、眼科、口齒、外科、女科、幼科などの下位分類が存在する。「瘧」に関する記載は主に、方論の雜病雜藥類に属する医書に見られる。本章では、この雜病雜藥類の中から宋代以前の主要な医書を取り上げ、「瘧」病の変遷について考察する。また、日本の『医心方』もその一類として論考の対象とする。

二一、「肘後備急方」——現存医書における「瘧」の初出

最初に「瘧」を正式に病名として記載する現存医薬書は『肘後備急方』であり、全称は『葛仙翁肘後備急方』という。現伝本に記載される「葛洪序」によると、「東晋」葛洪は最初『玉函方』という百卷本を著したが、当世の諸医家が作った備急便覧方に不満を感じ、『玉函方』を要約して、庶民にも簡単に入手できる安価な薬方を摘出し、本書の原撰本である『肘後救卒方』（三卷。以下、葛原撰本）を編著したという。「南朝齐梁」陶弘景はその原撰本に基づいて増補を行い、『補阙肘後百一方』（三卷。以下、陶増補本）を著した。残念ながら、両書はいずれも散佚して今に伝存させず、現存する『肘後備急方』（以下、『肘後方』）の諸本はすべて八巻の構成で、金の楊用道の附広を経た改訂本である。⁽¹⁸⁾

さて、この現存本の中の最善本とされる万暦二年（一五九四）本⁽¹⁹⁾を繙いてみると、「瘧」に関わる本論に有用な記述は二箇所見出せる。

ア 度瘧散、辟^ニ山瘧惡氣^一。若有^ニ黑霧鬱勃^一、及^ニ西^ニ南^ニ温風^一、皆為^ニ疫癘之候^一。方（略）辟毒・諸惡氣、冒^ニ霧行^一尤宜服^レ之。

イ 治^ニ瘧瘧^一。常山・黄連・豉^{（熬）}各三兩。附子二兩^{（炮）}。搗^レ篩^フ。蜜丸^ス。空腹服^ニ四丸^一。欲^レ發、三丸飲^ニ下^一之。服藥後、至^レ過^ニ發時^一、勿^レ喫^レ食。

アの内容は「治瘧氣・疫癘・温毒」諸方第十五」に属し、「度瘧散」

という薬物の製法と効用を紹介している。「度瘧散」または「度瘧散」は、後に日本の供御薬儀で奏進される元日御薬の一味として用いられるようになった。

イでは、「瘧瘧」を治療する薬物の製法と服用法が簡潔に説明されており、「治寒熱諸瘧方第十六」の節に配置されている。アの記載は後世の医書に頻繁に引用されているのに対して、イの薬方は『肘後方』にのみ見られる。ただし、『外台方』所引の佚書『備急』（前述）には、イと同様な薬方構成を有する「療瘧瘧常山丸方」が見られ、その製薬法と効用に関する説明文はイの記載をほぼ網羅し、より詳細に述べられている。そのため、『肘後方』の「治瘧瘧」方は、葛原撰本や陶増補本の内容ではなく、両佚書の成立より後に現れた「療瘧瘧常山丸方」（『備急』からの直接の引用であるかどうかは判断しがたい）を楊用道が要約して付け加えたものではないかと推測される。

『肘後備急方』の成立過程や書名に含まれる「備急」からも分かるように、この書物は薬方と服用法の紹介に特化した便覧的な性格を持ち、発病の原理や症状に関する記述はほとんど見られない。

二二、「諸病源候論」——「瘧」の病源と病因

「瘧」の病源と症状についての記録は、隋の巢元方が六一〇年に奉勅して編纂した病因・病態書『病源論』が、現存する資料の中で最初のものと考えられる。ところが、巢元方の原撰本は伝わらず、現存本はすべて一〇二六年に宋綬らの校訂を経た宋改本である。宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵の南宋刊本はその一つで、現存最古の宋刊孤本として

極めて貴重である。当該書の「瘴」に関する記載は二箇所見つかる。

まずは、「卷十・疫癘候」の最後に配属される「瘴氣候」である。前述の南宋刊本では、当該節において漏印が発生し、「行青草」に続く文章を欠いている。（本文及び訓点は、正保二年（一六四五）刊行の和刻本『重刊巢氏諸病源候総論』⁽²²⁾による。以下同様とする）

ア 夫レ嶺南ノ青草黄芒瘴、猶如シ嶺北ノ傷寒ノ也。南地暖ナル、故ニ

太陰ノ之時モ、草木不ニ黄落セ、伏蟄シテ不ニ閉藏セ、雜毒因テ暖ニ

而生⁽²³⁾。故ニ嶺南ハ從⁽²⁴⁾ニ仲春ニ訖⁽²⁵⁾ニ仲夏ニ行⁽²⁶⁾ニ青草ノ（以下、欠

失）

欠失の内容は四百七十七字にも達する。その影響は、以後の元刊本や明刊汪済川江瓘校本などにも及んだ。小曾戸洋氏は、『諸病源候論』の書誌について⁽²⁴⁾において、上述の南宋・元・明各刊本の「瘴氣候」項で発生する大きな異同について次のように述べている。

今日、北京図書館に一本が所蔵されている（小曾戸氏脚注…『北京図書館蔵中国医薬書目』、一九五四）。その書影には「楊氏海原閣蔵」と判読できそうな印記があるから、恐らく楊以増海源閣の旧蔵書ではないかと思われる。その図版を図一〇に掲げるが、これからして日本に伝わったものと同一版であることが知れる。

『儀顧堂題跋』はこの元刊本について、「明刊本と対校してみると、卷一〇の瘴氣候条は四百七十一字あるのに、明刊本は五十四

字あるのみで青草瘴以下の四百七十七字を脱している。このほか字句の誤脱は少なくない。外台秘要の所引と対校してみるとこの刊本もまた異同がある。日本の蔵書家には南宋刊本を有するものがあると聞くが、借校一過できないのは残念である」と述べ、明刊本と元刊本との校勘表を『群書校補』に刻入している。

続いて、氏は「卷十瘴氣候」の欠失部分について次のように紹介している。

瘴氣候は明刊本は五十一字よりなるが、元刊本には「仲夏行青草」の下にさらに四百二字分の文章がある。南宋刊本・李啓賢重校本は明刊本に同じく、和刻本・周学海本は元刊本に同じである。南宋刊本には版本の時点からこの四百二字はなかったようであるが、元刊本との関係については未詳である。

「北京図書館」（現中国国家図書館）所蔵の腰線単辺魚尾元刊本（以下、国図本）及びもう一つの元刊本である北京大学図書館蔵腰線双辺魚尾本（以下、北大本）を調べてみると、いずれも「行青草」までの五十四字しか刻入されておらず、それに続く四百七十七字を欠くことがわかる。国図本は、巻一の第一頁表のほか、「綱目」の目録題の下には「楊氏海原閣蔵」蔵書印が見えるから、小曾戸氏が書影を掲載した元刊本に当たる。

ところが、元刊本に依拠したとされる和刻本、及び『経籍訪古志』⁽²⁵⁾

に記載される「高階経宣蔵元刊本」と「伊良子氏蔵元刊本」(いずれも現存しない)のいずれかを江戸医学館が影写したとされる影元本⁽²⁶⁾には、現存する宋元明諸本にない四百十七字が確実に確認される。そのため、小曾戸氏が「(国図本の図版)からして日本に伝わったものと同版であることが知れる」とする主張には疑問符を打つべきであろう。ただし、影元本・卷十の七葉ウから八葉オにかけて記載されている脱文は、他の頁と比べて字形がやや崩れているように見受けられる。また、卷十尾題の位置も国図本と北大本とは異なっていることから、影元本が参照したのは、現存元刊本と同一の版本に補刻された葉である可能性がある。

一方、陸心源が『群書校補』において明刊本の校本として用いた元刊本(以下、陸元本)も存在した。これは『儀顧堂題跋』で言及された元刊本と同一のものと考えられる。小曾戸氏が国図本を紹介した直後、「この元刊本」と述べているのは、陸元本を国図本と同一版であると想定していたためであろう。しかし、陸元本における「瘧氣候」の刻入字数と脱落字数については、氏の論において一貫しない箇所が見られる。そのうち、「五十一」(刻入字数)とされているのは、題名「瘧氣候」を算入していなかったためと考えられる。「四百二」(脱落字数)は、恐らく『群書校補』(卷二十六)に輯録される陸元本の「瘧氣候」本文に付された校記(「瘧季夏」から「第也」に至る四百零二字、「仲夏行青草」の下に在り)を直接引用したものであろう。しかし、陸元本における「瘧氣候」本文の実際の字数は「四百零二」ではなく、四字少ない三百九十八字である。加えて、影元本では「臟腑」と書かれ

ている箇所が、陸元本では「臟腑」と表記されていることなどから、陸元本は現伝する元刊本及び影元本とも異なる別系統の版本である可能性が高いと推測される。

江戸医学館の影元本及び和刻本はどのような経路で宋元刊本の闕文を補完したのかという疑問はいまだ残っている。この問題はさておき、先に言及した闕部を有する和刻本をもって「瘧氣候」を補う。

イ (青草) 瘧、季夏^レ訖^ニ孟冬^ニ、行^ル黄芒瘧^一。量^ル其ノ用藥、
 体性^ヲ、嶺南ノ傷寒、但^タ節氣多^クハ温、冷藥小^シ寒^ニ於嶺北^ニ。
 時用^レ二熱藥^一、亦減^ススルコト^ニ其ノ鎔銖^ヲ、三分^ニシテ去^レ二^一。但^タ
 此ノ病ノ外候小^シ遲、因^ル二經絡ノ之所伝^ニ、與^ニ傷寒^一不^レ異。
 然^レ陰陽受^レ病^ヲ、会^ニ同^ニ表裏^ニ、須^ク三明^ニ識^ニ二患源^一、不^レ
 得^ニ二妄^ニ攻^ルコトヲ^一湯艾^ヲ。飯令^{モト}宿患^ヘ二痼熱^一、今得^ニ瘧毒^一、毒
 得^レ熱^ニ更^ニ煩^ス。雖^{ドモ}二形候正盛^{ナリト}、猶在^ニ於表^ニ、未^レ入^ニ
 腸胃^ニ、不^{シテ}妨^レ温^ヲ而汗^ス之^ヲ。已入^ル内^ニ者、不^レ妨^レ平^ヲ而
 下^ス之^ヲ。飯令^{モト}本有^テ冷、今得^ニ温瘧^一、雖^ニ暴^ニ肛熱煩滿^{スト}、
 視^レ寒^ニ正^ニ須^{モト}温藥^一汗^ス之^ヲ。汗^{シテ}之不^ズバ歇、不^{シテ}妨^ニ
 寒藥^一下^ス之^ヲ。(中略)治^{シテ}不^レ差、成^ニ黄疸^ト。黄疸不^レ差、
 為^ル二尸疸^ト。尸疸ノ疾^ハ者、嶺南ノ中^ニ瘧氣、土人連歴^{シテ}不^レ差、
 變^{シテ}成^ニ此病^ト、不^レ須^ニ治^也。嶺北ノ客人^ハ、猶得^ン二斟酌^{シテ}
 救^{コトヲ}之^一。(後略)

以上の検討をもとに、南宋刊本の残文と合わせて、「瘧氣」の名義と

「瘴氣症」の特徴をまとめると次の四点に整理できる。

1. 「瘴氣候」で言及される「瘴氣」は、嶺南特有の現象であり、南方は温暖なため、虫が冬ごもりをせず、それによって瘴毒が生じるとされている。

2. また、「瘴氣症」の病原である「瘴氣」は、名前の通り、「氣」の形態で存在するものである。²⁹⁾「瘴氣症」は、症状と経絡での所伝、ないしそれに対応する薬方（ただ、用薬の量と時期には小異がある）は、嶺北の傷寒と同様であるから、傷寒大類の病氣と認識されている。

3. 季節に応じて、仲春（二月）から仲夏（五月）の間で流行する瘴氣は「青草瘴」、季夏（六月）から孟冬（十月）の間で発生する瘴氣は「黃芒瘴」と称する。

4. 患者が瘴氣に冒される前にすでに「熱」がある場合、その症状は通常の瘴疾よりも深刻である。もともと「冷」（悪寒）がある場合は、「瘴」にかかっても傷寒の治療法を採用すべきである。治療を受けても回復しない場合は「黃疸」に転じ、長期にわたって「黃疸」に罹患すると、最終的には「尸疸」³⁰⁾に至ってしまう。ところが、瘴についての記載はもう一箇所に見られる。それは巻十の「山瘴瘴候」にある一節である。

ウ 此病、生^ナ於嶺南^ニ、帶^フ山瘴之氣^ヲ、其^レ状、發^シ寒熱^ヲ、休作有時、皆由^テ下^下峽^ム溪源嶺^ニ瘴^ヲ、濕毒^ニ氣^ニ故也。其病重^シ於傷暑^ノ之瘴^一。³¹⁾

「瘴氣症」と同様に、「山瘴瘴」も嶺南特有の病氣である。ただし、「山瘴瘴候」が収められる巻十一は、「瘴諸病」という副題を持ち、字面の通り、全巻にわたって「諸瘴」の病因と病態を紹介している。しかも、「寒熱、休作」や「其病重於傷暑之瘴」といった記述から、この病は傷寒類に属する「瘴氣症」とは異なり、明らかに瘴類に分類される病氣であることが分かる。

一方、『外台方』（巻五・山瘴瘴方）には、左のような記載がある。

エ 『小品』、療^ス山瘴瘴^ヲ。陵^{リョウ}鯉^リ甲湯。南方山嶺溪源、瘴氣毒作。寒熱^ニ發作^ス無^シ時、癢^{キクツ}黃、腫滿、四肢痺弱、皆山毒所^レ為也。（藥方略）出^ス第六卷中。千金・文仲・備急・經心録並同。

「小品」は、『小品方』のことである。ここでは、「山瘴瘴」を治療する「陵鯉甲湯」の薬方とその製法が紹介されており、合わせてその病原も説明されている。その内容は、「南方の山嶺や溪流で瘴氣毒が発生し、その山毒によって、（Ⅰ）寒熱が不定期に発作し、（Ⅱ）筋力の低下や黄疸が生じ、（Ⅲ）むくみが現れ、四肢の痺れや虚弱といった症状が引き起こされる」というものである。つまり、瘴氣とは南方の山溪から生じる毒氣であり、（Ⅰ）瘴、（Ⅱ）黄病（病源論卷十二）、（Ⅲ）脚氣、などの致病要素として捉えられている。次に挙げられる重出医書は、いずれも『小品方』より後に成立している。したがって、「山瘴瘴」という病の初出は五世紀成立の『小品方』であると認められる。また、前節で葛原撰本の『葛氏方』における「瘴瘴」の存在が否定され

たことから、後世の「瘧瘧」という名称は、「山瘧瘧」の「山」の字が省略されたものと推測される。

なお、「山瘧瘧候」という徴候名が宋刊本の総目録および巻十一の巻目録において「山瘧瘧候」と表記されている点にも注意が必要である。この点については次節で詳述する。

二一三、『医心方』——もう一つの「瘧」

『医心方』は、丹波康頼によって撰述され、花山天皇の永観二年（九八四）に朝廷へ進上された、日本現存最古の医学全書である。

『医心方』の疾病分類は『病源論』を踏まえており、同書が最大の引用源でもある。その引用文には宋改以前の内容が多く含まれており、『病源論』や『千金方』といった宋改を経た医書の原形を知るための不可欠な資料とされている。それだけでなく、『葛氏方』⁽³¹⁾をはじめ、『録驗方』や『集驗方』などの佚書からの引用も多く見られ、『外台方』と同様に、佚書を輯録するための貴重な参考文献として重んじられている。

周知のように、現存最古の『医心方』写本は東京国立博物館所蔵の半井家旧蔵本の中の天養二年（一一四五）加點本二十五卷（以下、半井家本）である。書写年代について諸説があるが、天養二年を遡ることと遠くない平安時代後期に見積もっておけば無難である。⁽³²⁾

杉立義一氏によれば、康頼の原撰本に基づいて作成された最も初期の写本には、清書本（進上本）、医家本（丹波家控本。その系統には重忠本と重基本があった）、及び宇治本（宇治入道太相国藤原頼道に進呈

された本）の三種が存在したとされる。⁽³³⁾ 半井家本において「御本」（巻八の表紙見返し）と称される書写底本、もしくはその底本の祖本は、「平安時代中期の写本、すなわち丹波康頼撰述の原本、もしくはその原本を忠実に写した系統本（筆者注：清書本系統）⁽³⁴⁾」と見られている。一方、江戸時代まで完本（全三十巻）が伝存していた仁和寺本（現存五巻）は、丹波憲基が医家本の重基本をもとに、九条兼実所蔵の宇治本（或いはその系統本）を借りて移点したものと推測されている。⁽³⁵⁾

ここで、半井家本を底本に、仁和寺本の多紀元惠臨写本をもつて校合し、巻十四に収録される「治瘧瘧方第十九」⁽¹⁾（④）及び同巻「避傷寒病方第二十五」の「度瘧散方」⁽⁵⁾の翻刻文（訓点は原本のまま）を次のように作成する。通し番号・傍線と丸カッコ内の内容は筆者が付したものである。

- ①（巻十四）治瘧瘧方第十九
- ②『病源論』云、山瘧瘧、此病生於嶺南、帶^ナ山瘧之氣也。其状、（仁和寺本：「発」ある）寒熱休作有時、皆由挾溪源嶺瘧毒氣故也。其病重於傷暑之瘧。（↓二一二ウ）
- ③『耆婆方』治瘧瘧要方（右傍注に「朱」宇治本無（別筆、墨）之、医本等有之」とある）（方略）
- ④『録驗方』治瘧及瘧氣方（方略）
- （同巻・避傷寒病方第二十五）
- ⑤（『葛氏方』）又云、度瘧散、辟瘧山惡氣。若有黑霧鬱勃、及西南溫風、皆為疫癘之候。（方略）（↓二一一ア）

「瘡」「瘰」の表記に限って言えば、半井家本とは系統を異にする仁和寺本の表記は、半井家本のそれと完全に一致する。また、③を除き、その他の各条ではすべて「瘰」と表記されている点に注目したい。ただし、③の「耆婆方」の右傍には、「宇治本に当該条がなく、医本（医家本に同じ）などには当該条がある」という旨の注記が天養二年の加点時に施されていた。天養二年の時点で、医家本系統は丹波家の分家により、度重なる伝写と添削を経っていたとされる。⁽³⁸⁾それに比べて、宇治本は古態を保持していたと考えられる。そのため、③の「耆婆方」条は、康頼の原撰本には存在せず、医家本系統の伝写過程において添入されたものである可能性が高いと推測される。

半井家本は書写が完成した後、現存していない宇治本や医家本などを以て二度以上の校合が行われたものである。校合の対象は字句から文章の異同に及んでおり、校記は朱書や墨書で本文の傍に記されている。前引する各条では、「瘰」を校正する痕跡が見られないため、宇治本や医本なども同じ表記を使っていたと推定してよからう。なお、半井家本には「瘰」「瘰」の表記が併用されていることから、平安中期の抄者は二字の形態を正確に把握しており、誤写を犯さなかったと考えられる。よって、諸本の祖本である丹波康頼の原撰本は、「瘰」の表記において現存写本と異ならないと考えてよからう。

ほぼすべての「瘰」と「瘰」が「瘰」に統一されている中国医書の宋以後刊本に比べて、『医心方』に書かれた内容は、まさに諸中国医書の原初形態に最も近いものであると言いきである。そのため、本稿でここまで「瘰」の表記を考慮せず、「瘰」の表記に拠って引用してき

た中国医書の本文については、再考する必要がある。

二―四 中国医書における「瘰」の表記の復原

前節の結論を踏まえ、各中国医書の宋（明）刊本以前の原初形態を推定してみよう。まず、『医心方』のテキストによって直ちに訂正できる書物から始める。隋に成立してから宋改を経た『病源論』において「山瘰瘡」や「山瘰之氣」（二―一ア）と書かれているものは、『医心方』の第②条ではそれぞれ「山瘰瘡」と「山瘰之氣」と表記されている。また、二―二の末尾で触れた宋刊本の総目録および巻目録に見られる「山瘰瘡候」という表記を考え合わせると、巢元方が『病源論』を著した当初、「山瘰瘡」という表記を採用していた可能性が極めて高い。そもそも、『病源論』の引用文中には「溪源嶺瘰」という言葉があるから、「山瘰瘡」よりも「山瘰瘡」の表記が自然であろう。ちなみに、元刊本系統の諸本では巻目録が削除され、総目録の「山瘰瘡」も正文に合わせて「山瘰瘡」に統一されている。

『医心方』第④条に引用される『録驗方』は、唐初の甄権が撰した『古今録驗方』（五十巻）である。原本は散佚して参照できないが、『医心方』や『外台方』などの医学全書にしばしば引用されているから、対校して輯佚することは可能となる。『医心方』に記される「④『録驗方』治瘰及瘰氣方」、及び『外台方』に引用される別の薬方である「『古今録驗』瘰瘡及瘰氣常山酒方」によると、「瘰」を引き起こす毒気は「瘰氣」ではなく、「瘰氣」と表記されていたことが分かる。宋臣らが『外台方』を校訂する際、古医書にある「瘰」や「瘰」などを「瘰」に

統一しようとしたが、『古今録驗』の「瘴」を見過ごしたと推測される。それゆえにかえって医書の旧態が伝わったのである。その点において前述の『病源論』の目録における「山瘴瘧」は「外台方」と共通している。さらに踏み込んで述べると、『外台方』所引の『小品方』の「瘵^レ山瘴瘧^一。陵鯉甲湯。南方山嶺溪源、瘴氣毒作。寒熱発作無^レ時、痿^{クワ}黄、腫満、四肢痺弱、皆山毒所^レ為也」(二二二エ)という佚文における「瘵」は、「南方」より「山嶺」や「山毒」との関連性が強いことから、もともと「瘴」と表記されていた可能性が高いと推定される。

『肘后方』にある「度瘴散、辟山瘴惡氣」の一文について、『医心方』第⑤条では、楊用道の補訂を経ない陶増補本の一種と思われる『葛氏方』の引用で「度瘴散、辟瘴山惡氣」と書かれている。また、『医心方』より約六十年前に成立した『延喜式』にも同文の引用で同様の表記が使われているため、陶増補本は最初から「度瘴散、辟瘴山惡氣」と作っていたのではないかと推測される。したがって、度瘴散を収録する章題「治瘴氣疫癘」も「治瘴氣疫癘」と復原すべきである。

作品の成立順に沿い、もう一度整理してみよう。附広を経ない『葛氏方』における「瘵」は「瘴」と作っていた。「瘴氣」はその山偏から直観できるように、南北を問わず、山中の毒氣全般を指していた。「瘴氣」によって引き起こされた「瘴氣症」は、疫癘類に近い病氣であったと考えられる。

一方で、「山瘴瘧」と称される病も存在した。その発症要因として、『小品方』では「(A)南方」と「(B)山嶺溪源・山毒」を挙げ、『病源論』では「(A)嶺南」と「(B)山嶺之氣・塊溪源嶺瘴濕毒氣」が

示されている。すなわち、(A)類の「南方の酷暑」と(B)類の「山溪の毒氣」が、「山瘴瘧」を引き起こす主要な病因である。換言すれば、「山瘴瘧」は「(疫癘類の)瘴氣症」と、「傷暑之病」である「瘧」との併発症である。その南方特有の「山瘴瘧」を誘発する毒氣について、『小品方』および『古今録驗方』では、「疫癘類」の病原と同様に「瘴氣」と表記されている。

そこで、医書以外の文献に見られる特異な「瘴氣症」の一群が想起される。例えば、慧皎『高僧伝』(五一九年成立)「宋黄龍釋曇無竭伝」には、「経歴龜茲、沙勒諸国、登葱嶺、度雪山、障氣千重、層冰万里^④」という一文があり、青海から新疆にかけての西域の高山に流行する毒氣が「障氣」と称されていた。この「障氣」は、『南齊書』「河南伝」に記載される吐谷渾(青海西寧周辺)の「鄯氣^⑤」、および『魏書』「高宗紀」に見られる西平周辺の「瘴氣^⑥」と同種のものである。現代の研究者たちは、これらの「瘴氣」を例外種として扱い、それによって誘発される病氣を南方の瘴氣症とは全く無関係な高山病と見なしている。しかし、この解釈は「瘴」という表記に引きずられた結果ではないかと思われる。

嶺南と北西一帯は、多山という特徴を共有する。また、両地域はいずれも権力の中枢から遠く離れた辺境に位置するため、海拔に関する知識が乏しかった前近代の人々にとって、これらの地域に漂う「瘴氣」は同じ性質のもの、すなわち「山溪の毒氣」と認識された可能性が高い。例えば、「はじめに」に引用した『文選』の劉孝標「広絶交論」の「流離大海之南、寄命鄯癘之地」という一文について、唐の呂向は

「鄣、山。癘、惡氣。言^三流^三離^三遠^三惡^三之^三處^三」⁽¹⁵⁾と注釈している。この「大海之南」で発生する「鄣癘」の特徴について、「山」と「遠惡」の要素だけが強調されている。また、六四六年に成立した『大唐西域記』の卷十では、現在のインド北部にあった迦摩縵波国について、「境接西南夷」（中略）然山川險阻、瘴氣・氣疹・毒蛇・毒草、為^{マズ}害^ハ滋^ス甚^クと記されている。「広絶交論」と同様に、この記述では、「瘴氣」が西南で発生するとされているものの、その方位的特徴について言及せず、「山川」と「毒」の要素だけが取り上げられている。

巢元方は、南方特有の「瘴氣」と、山中の毒氣としての「瘴氣」とは別物であるという問題に気づいたのであろう。南方特有の「瘴氣」を系統的に紹介するために、巢氏は長い説明文を書き、最終的に出来上がったのは、『病源論』卷十の最後に配置されている、先掲の「瘴氣候」である。「瘴氣候」（二一・二ア・イ）にある内容は、ほかの医書においてほとんど見られないため、対校も不可能となっている。ただし、『病源論』作成当初も「瘴氣候」と書かれていたのではないかと推測される。理由として、以下の四つが挙げられる。

- a) 全文にわたって「山」への言及はない。（証拠）
- b) 同じく嶺南特有の「山瘴癘」の病因である「瘴氣」と区別する。（動機）
- c) 同著後文の「山嶂之氣」や「山瘴癘」と区別する。（動機）
- d) 所属病種の「疫癘」の病垂れ（^ハ）に迎合する。（動機）

ところが、「嶺南の瘴はなほ嶺北の傷寒の如し」という説明と「山溪毒」要素の不在はさらなる混乱を招いた。つまり、前述の「疫癘」をもたらず「瘴氣」と、「山瘴癘」の病因の一つとされる「瘴氣」に加えて、「傷寒大類」に近い第三種の「瘴氣」が巢氏によってまとめられたのである。この説がそのまま受け継がれた形跡は見られないものの、「瘴氣」を南方特有のものとする定義は、「或謂」などの形で後世の医書に浸透し、「瘴」という表記の統一に決定的な影響を与えたと考えられる。

そもそも「疫癘類」の「瘴氣」や「度瘴散」に見られる「瘴」は、本来の意味から考えると「山偏」で表記するほうが正確であろう。しかし、「山の隔たり」を意味する「瘴（鄣）」は、『病源論』の「瘴氣候」や医書以外の文献からの強い影響を受け、次第に「瘴」という形に変化していった。「瘴氣」が「瘴氣」となったことで、山の意味合いが薄れ、主に南方の毒氣を指すようになった。そして、「山中の毒氣」というもう一つの意味が見過ごされるにつれ、「山瘴癘」は「山瘴癘」（宋改病源論や外台方など）となり、最終的には「山」も省略され、「瘴癘」に簡略化されたと考えられる。『耆婆方』に見られる「治瘴癘」や、『録驗方』の「療瘴癘」も、こうした過程の産物であろう。その結果、「疫癘類」の「瘴」であれ「瘴類」の「瘴」であれ、現存する宋改以後の医書では、例外なく「瘴」に統一されたのである。「瘴氣」の名残は、「度瘴散」や「治瘴氣方」といった形でのみ伝存されている。

さらにその後、「瘴」ですら省略され、「瘴」の一字だけで「山瘴癘」を意味するようになった。一一四で引用した『備急』の「夫瘴与瘴、分

作両名、其実一致」は、その代表的な例である。「瘧」と言えば、自然に「南方の瘧瘧」を想起するという先人観が人々に広く浸透していたのである。

北宋の趙佶が勅撰した『聖濟総録』⁽⁴⁷⁾には、「論曰、伝言、瘧者、山川瘴毒之氣。又云、江山霧氣多瘧。〔中略〕今原〔広南山川地形瘴氣所生之因〕〔後略〕」という一文がある。編纂者は、先人が唱えた「瘴氣は山川の毒氣である」という説を否定することなく、かえってそれを活用し、広南地方は山川が多いため瘴氣が盛んであると主張している。さらに、後文では「瘴氣独盛於広南」と述べ、北西地方の「瘴氣」は完全に忘れ去られている。こうして瘴氣は嶺南特有の現象とされ、「瘧」という文字には本来存在しない「暑熱」という属性が付与されることとなった。また、瘧瘧は「傷暑之病」であるゆえ、暑熱の南方で瘴氣に感染すると、自然に瘧瘧へと転化するのである。これが、『聖濟総録』で「瘴氣」と「瘧瘧」が共に「瘧病門」に分類されている根本的な理由でもある。

おわりに

本稿では、『医心方』に引用される中国医書が古態を残存していることを証明したうえで、「瘧」の表記を復元する作業を通じて、中国医書における「瘧」から「瘧」への表記の変遷の経緯を推定し、その結果を付録の図にまとめた。それにより、現在私たちが熟知する「南方の毒氣」を意味する「瘴氣」だけでなく、より原義に近い「山溪の毒氣」

という意味を持つ「瘴氣」も存在していたことを指摘した。

「瘧瘧」は南宋に入るとさらに細分化され、王栻は「指迷方瘧瘧論」において、これを「冷瘧」や「熱瘧」、また「瘧瘧」などに分けている。元の釈繼洪が編纂した『嶺南衛生方』は「瘧瘧論」の到達点と言える。一方、医書を含む諸典籍における「しやう」の表記が「瘧」へと統一される過程は明代まで続いていたことが分かる。その頃になると、「瘴氣」と全く無関係な眼疾においても「内瘧」と表記される病氣が見られるようになった。病氣について記述する際、「瘧」という部首は、前述したほかの部首に比べて個性が乏しく、殆ど無意味だったと考えられる。

呉可性は、最初の温疫専論『温疫論』（明末成立）の巻下に収録される「正名」という一節において、「温」と「瘧」との関係について分かりやすく説明している。

『傷寒論』曰、発熱而渴、不惡寒者為温病。後人省「シ」加「瘧」為「瘧」、即「温」也。如病證之「證」、後人省「文」作「証」、嗣後省「言」加「瘧」為「症」。〔中略〕要之、古無「瘧・痢・症」三字、蓋後人之自為變易耳、不可因易其文、以「温・瘧」為中病上。⁽⁴⁸⁾

「瘧疫」、「温疫」、「温病」は異名同体の病氣であり、いずれも悪寒を伴わない傷寒類の「温病」と同じであると述べている。この主張の妥当性はともかくとして、「瘧」という字はもともと存在せず、後世の

人々が「シ」を省略し、「疔」を付けて「瘟」と表記するようになったという説には納得できるだろう。「瘴」もまさに同様の経路をたどって変容してきたのである。

「瘴」の表記が最終的に定着したのは清代である。例えば、『三国志』の南宋刊本や明刊南北監本などでは「日南鄣氣」(魏書・公孫瓚伝)や「歳有旧風障氣之害」(呉書・陸胤伝)と記されているが、清乾隆四年(一七三九)武英殿本ではすべて「瘴」に改められている。さらに本文に付される「考証」には、「監本誤作鄣氣、今改正」と記されている。

この表記は近現代にも影響を及ぼしている。第二節で言及した『大唐西域記』の「瘴氣・氛疹」という一文について、京都帝大文科大編『考異索引』では「疑當作瘴」⁽¹⁾と校注されている。また、『外台方』所引の『録驗方』の「瘴瘴及瘴氣」についても、高文柱氏は「瘴氣、疑當作瘴氣」⁽²⁾と注釈している。こうして、「瘴」は「障」や「瘴」といった表記に代わり、もはや疑う余地のない正統な表記となったのである。

注

- (1) 列伝巻第十四。紹興九年江南東路轉運司刊本による。特に断らない限り、所引漢文の訓点は筆者の私意によって施したものである。
- (2) 左鵬「漢唐時期的瘴与瘴意象」(『唐研究』第八卷、二〇〇二年)。
- (3) 蕭瑋「漢宋間文獻所見古代中国南方的地理環境与地方病及其影響」(『中央研究院歴史語言研究所集刊』第六十三本第一分、一九九三年四月)。

- (4) 俞紹初・劉群棟・王翠紅点校『新校訂六家注文選』(鄭州大学出版社、二〇一三年)底本には、奎章閣六家注活字本を使用。下同。
- (5) 張軻風「從「障」到「瘴」：「瘴氣」說生成的地理空間基礎」(『中国歴史地理論叢』第二十四卷第二輯、二〇〇九年)、左鵬「瘴氣」之名与実商榷」(『南開學報(哲学社会科学版)』二〇一一年五月)。
- (6) 左(二〇〇二)。
- (7) 周祖謨編『唐五代韻書集存(下冊)』中華書局、一九八三年。
- (8) 『梁』顧野王編、〔北宋〕陳彭年重修、沢存堂本影印『宋本玉篇』(中国書店、一九八三年)。
- (9) 〔宋〕陳彭年等奉敕撰『大宋重修廣韻』(国立国会図書館蔵宋刊本)。
- (10) 『重広補注黄帝内経素問』(明嘉靖二十九(一五五〇)年顧從德影宋本。中華再造善本明清篇影印) 卷第九・熱論篇第三十一。
- (11) 同前注。
- (12) 現在私たちが言う『傷寒論』は、通常明の趙開美が覆刻して『仲景全書』に収めている『宋版傷寒論』を指し、『金匱要略』(同じく張仲景の原撰ではない)とともに日本漢方医古方派に根本医書と認められている。張仲景原撰『傷寒論』は、『宋版傷寒論』とかなり異質なもので、既に散逸して伝存していない。「現代に宋版の旧を伝える『傷寒論』は趙開美本しかない。」(真柳誠「趙開美の『仲景全書』と『宋版傷寒論』」『日本医史学雑誌』五二巻一四四頁、二〇〇六年三月)。
- (13) 『王翰林集註黄帝八十一難經』(早稲田大学図書館蔵慶安五年(一六五二)刊『難經集注』。請求記号ヤ09 00207) 卷四。当該本(慶安五年刊本)は、『難經』の基準テキストとされている(宮川浩也、天野陽介、小曾戸洋、花輪壽彦「『難經集注』について」『日本医史学雑誌』五六(二)、二〇一〇年)。
- (14) 東洋医学善本叢書影印宋刊本。静嘉堂文庫所蔵重要文化財宋本『外台秘要方』の縮印。
- (15) 高文柱は王方慶撰『隨身左右百発百中備急方』(十巻)を指すと主張し

ている（『外台秘要方校注』「解題」学苑出版社、二〇一〇年）。それに
対して、黄斌・趙昂之は、『備急』は張文仲『隨身備急方』（三卷）であ
り、しばしばそれと前後して出典文献リストに現れる（「張」文仲）と
いう書物は実は王撰『隨身左右』であろうと推測している（『外台秘要
方』「張文仲方」考、一九九〇）。しかし、小曾戸洋は、『外台秘要方』
所引本は少なくとも九卷はあったはずであるから、張文仲の『隨身備急
方』三卷に当たらないと否定している。張・王はともに初唐の人で、医
学書の編纂に協力して携わったようである。王方慶にはまた、『袖中備
急要方』（三卷）という著書がある（『新唐書』芸文志）。巻数から見
ると、恐らく『袖中』は『隨身左右』の略本に当たるものと推測される。
上述する張・王が撰した医書はいずれも散逸して伝わらない。

- (16) 三本栄『朝鮮医学史及疾病史 補訂』（朝鮮疾病史部分）思文閣出版、一
九九一年

- (17) 医書の分類は、各時代の芸文志や経籍志、近現代の医学史研究（例えば、
岡西為人『宋以前医籍考』）によって若干の違いがあるものの、本章で
取り上げる諸医書の分類に関しては大きな相違は見られない。

- (18) 小曾戸洋「肘後備急方」（『中国医学古典と日本—書誌と伝承—』塙書房、
一九九六年）初出は「漢方古典文献概説（五）肘後備急方」（現代東洋
医学四（四）、一九八三年十月）。

- (19) 小曾戸（一九八三）。

- (20) 〔晋〕葛洪原撰、〔梁〕陶弘景増補、〔金〕楊用道附広『肘後備急方』（明
万曆二年（1534）岳州劉自化校刊本、内閣文庫蔵）。

- (21) 何百年にもわたって伝承されてきた多くの医書は、度重なる書写や改編
によって内容や表記に混乱が生じていた。また、社会情勢や気候の変動
により実用性も低下していたため、理論の更新や薬方の取捨選択、度量
衡の統一、避諱字の復元などが求められていた。そうした中で、宋の儒
臣によって行われた医書の改訂、いわゆる「宋改」は、文献学の観点か
らすれば、諸医書の旧態を損なったことが最大の欠点とされるが、当時

の人々にとっては必ずしも悪い影響を与えるものではなかった。

- (22) 内閣文庫蔵、請求番号 303.0018。

- (23) 汪濟川江瓊校本、方鉉校本（未見。江瓊校本の重刊としてそれと全く同
じであると言われている）、呉勉学本、以上の明刊本三種は、いずれも
同じ箇所が欠失している。

- (24) 小曾戸洋「『諸病源候論』の書誌について」（『解題・研究・索引（東洋
医学善本叢書八）一九八二年）。

- (25) 森立之『経籍訪古志』（廣谷雄太郎『解題叢書』廣谷国書刊行会、一九
二五年）では、「又、今行正保乙酉刊本、亦据此本」（重刊巢氏諸病源
候総論五十卷、目錄一卷、元槧、京師高階経宣蔵）とある。一方、山
本惟允は『諸病源候論解題』において、「見行本末詳其原」。或云三元
版、然無証拠也」と述べ、「正保本が元刊本に基づく説」に疑問を呈
している。いずれにせよ、正保本は「善本性が高い」本であると小曾戸
氏が主張している。

- (26) 小曾戸（一九八二）。

- (27) 内閣文庫蔵、請求番号 303.0021。

- (28) 「壯」の誤か。

- (29) 陳蔵器著「本草拾遺序例」（唐慎微撰『重修政和經史証類備用本草』卷
一・序例上所収）では、「嶺氣多瘰、足主瘰瘰之物」とある。

- (30) 黒疸と同じか。『諸病源候論』黄病諸候「是夫黄疸・酒疸・女劳疸、久々
多变为黒疸」。

- (31) 『医心方』所引の『葛氏方』について、小曾戸洋は「この書は『日本国
見在書目録』所掲の『葛氏方九』と同一書ではないかと思われる。」と
述べ、陶弘景増補「補闕肘後百一方」に同定している。

- (32) 山本信吉「半井家本『医心方』について」（『半井家本医心方附録 医心
方の研究』オリエント出版社、一九九四年）小曾戸洋は「これら計二五
巻の最古写の部分は、康頼の原撰本とみる説、天養二年（一一四五）の
写本であるとみる説などがあり、確定的な結論は今のところ下せないが、

- ともかく平安時代の古写本であることは疑いない。」と指摘している(『医心方』)『中国医学古典と日本―書誌と伝承―』塙書房、一九九六年)。
- (33) 杉立義一「医心方の伝写について」(『半井家本医心方附録 医心方の研究』オリエント出版社、一九九四年)。
- (34) 山本(一九九四)。
- (35) 杉立義一「医心方の伝来」(思文閣出版、一九九一年)。
- (36) 国立公文書館内閣文庫蔵、請求番号特0190003。この臨写本の底本たる仁和寺蔵古鈔本について、小曾戸洋氏は、「これらはその内容からして、むしろ半井本よりも古態をよく保存していると考えられるふしもあり(後略)」と述べている。江戸時代当時には、十六巻が存在していたが、今は僅かに五巻のみ伝存しているにすぎない。
- (37) 書名・著者・巻数いずれも不明。「著婆」を書名に含める医書には、『著婆脈決(訣)』(十二巻)・『著婆脈経』(一巻或いは三巻)・『著婆五藏論』(二巻)・『著婆要用方』(二巻)・『著婆八十四問』(一巻)・『著婆茯苓散方』(二巻)・『著婆所述仙人命論方』(三巻)がある。『医心方』巻二には『著婆脈決経』という書名の医書が引用されており、『日本国見在書目録』が著録する釈羅什注『著婆脈決十二』と同一書である可能性がある(岡西為人『宋以前医籍考』)。馬継興は、『医心方』に九十九条(小曾戸洋は六十条としている)を引用された『著婆方』は、『著婆脈訣』と同一書ではないと明言している(「關於『医心方』所引古文獻条数的核実―答藪内清教授、一九八六年。小曾戸洋も馬氏と同じ方針で目録を作っている(『医心方』引用文献名索引)。高文柱は、『著婆方』は「治」と「恒」の諱を避けていないことや、「方」が書名に含まれていることから、隋以前に成立した総合的な経方書である『著婆所述仙人命論方』を指す可能性があると述べている(『医心方』華夏出版社)。
- (38) 杉立(一九九四)。
- (39) 『録驗方』が作られた当初は「治瘧」と記されていたが、『外台方』の編纂時に、唐高宗李治の諱を避けるため「療」に書き換えられた。さらに後世において、後文の「瘧氣」に引きずられて「療」が誤って「瘧」と書かれ、現在の形に至ったのではないかと推測される。
- (40) 『延喜式』三十七巻の現存諸本には、半井家本『医心方』ほど古い写本は確認されていない。ただし、以下に挙げる諸本では例外なく「度瘧散」と表記されている。国立歴史民俗博物館蔵土御門家本、書陵部図書寮文庫蔵壬生家本、坊城俊方貞享五年(一六八八)写本、慶安元年修訂刊本、享保八年(一七二三)修訂流布本、文政十一年(一八二八)刊雲州本。大正新修大蔵経本による。
- (41) 六世紀前半成立。蕭子顯編纂。中国国家図書館蔵宋刊本南宋中期繆珍補刻葉による。静嘉堂文庫蔵南宋刊本嘉靖九年(一五三〇)補刻葉は「瘧氣」と作る。
- (42) 天保五年(五五四)魏収編纂。南宋前期刊本による。
- (43) 左(二〇〇二)、王子今「漢晋時代の「瘧氣之害」」(『中国歴史地理論叢』第二十一巻第三輯、二〇〇六年)。
- (44) 注の「鄣」は諸本に異同はない。
- (45) 玄奘述・弁機筆録。底本には高麗藏本を使用。石山寺蔵古写本・観智院蔵宋本・宮内庁本・思溪藏本は「障」、明径山本は「瘧」と作る。
- (46) 『大徳重校聖濟總録』文化十三年(一一八六)刊本(最善本とされている)。国立国会図書館蔵。
- (47) 張杲著『医説』(明嘉靖二十五年刊瀋藩本)巻五・眼疾・治内瘧。宋刊系統の諸本は、「内障」と作る。
- (48) 国立公文書館内閣文庫所蔵、康熙四十八年(一七〇九)刊劉方舟校訂本による。
- (49) 『肘後方』治傷寒時氣温病第十三にも、「其年歲月中有瘧氣」。兼挾鬼毒相注。名為「温疫」とあり、「温疫」を「疫癘」と同等とする主張が説かれている。『医心方』巻十四・傷寒証候所引の『葛氏方』にも同文が見られるため、「温疫即疫癘」という認識は六朝時代から存在していたと考えられる。
- (50)

(51) 京都帝国大学文科大学編『大唐西域記(考異索引)』国書刊行会、一九七二年。

(52) 高文柱校注『外台秘要方校注』学苑出版社、二〇一〇年。

【付記】

本稿は令和五年度第42回和漢比較文学学会大会(二〇二三年十月八日。於京都府立大学)における口頭発表の一部を大幅に加筆修正したものです。その質疑応答において、楊昆鵬先生、桑原一歌先生をはじめ、貴重なお教示・ご意見を賜りました先生方に、厚く御礼申し上げます。

